

【助成 40-69】

デジタル時代におけるヒト固有なコミュニケーション方策の変化予測

文部科学省 事務官 阪口 幸駿

〔研究の概要〕

デジタル化が叫ばれ高度に情報化されつつある昨今の潮流では、経済的な豊かさを増強させる一方で、本来アナログな生き物であるはずの人間の、「人間らしさ」や「人間性」の喪失につながるものが懸念される。したがって、「加速度的に進展する高度なデジタル社会やそれを後押しするデジタル技術」と、「心の豊かさが担保された環境下でのつながりの維持」の両立は、現代社会における喫緊の課題であり、“人間本来コミュニケーション”の持続可能性向上を目指す新たなコミュニケーション様式の模索とその精緻化が不可欠となる。そこで本研究では、「人間らしさ」や「人間性」といった定義が曖昧で且つ定量化が困難な概念をどのように理解できるか学際的に整理し、わたしたち人間がそもそもどのような認知・心理的特徴を持つ固有な生物であるのか捉え、コミュニケーションにおいて、どの部分でデジタルとの親和性を低下させてしまう可能性があると考えられるのか、探究した。

〔研究経過および成果〕

【研究方法】

研究方法としては主に、①文献調査と②研究会開催、③セミナーシリーズの3つを実施した。①まず文献調査では、コミュニケーションにおける人間固有な認知・心理的要因とそのメカニズムについてテーマドリブな発想に基づき、心理学、哲学、言語学、知能情報学など分野を問わず、幅広く学際的に調査を行った。②研究会では、2 個体間以上の間におけるコミュニケーションに関する発表を募り、2 回の開催で合計 21 名からの知見の提供を受けた。また、研究会内部で「デジタルコミュニケーションとアナログコミュニケーションのギャップ」に関するワークショップを開催し、参加者同士による議論を重ね、意見交換を行った。③セミナーシリーズでは、コミュニケーションや最新のデジタル・人工知能の動向に詳しい専門家を招聘し、多様なジャンルからの合計 22 回におよぶ連続講演と、今後のコミュニケーションの在り方に関するディスカッ

ションを実施した。

【研究成果】

コミュニケーションを巡る有名な考え方の1つに、シャノン・ウィーバーが提案した情報通信のコミュニケーションモデルがある(Shannon & Weaver, 1949)。このモデルではコミュニケーションの送信者は伝えたい情報を何らかの媒体に符合化し、それを受け取った受信者はもとの情報に復元して情報を得るといった、「情報伝達」の側面に注目している。このモデルではコミュニケーションという曖昧な行為を定式化し、システムチックに理解可能とさせる反面、このような古典的な見方では人間行為における何か重要な要素を見落としている可能性もある(三木, 2022)。

例えばわたしたち人間は日々顔を合わせる際には挨拶を欠かさないし、2 人以上で集まって時間をもて遊ぶ際には、そこに自然と雑談がはじまる。このようなコミュニケーション形態を考えると、ここではいったいいかなる「情報」を伝達していることになるのであ

ろうか？そこには情報性は皆無であって、目的もなく、あるのは社交性のみであると想定される。人類学者のマリノフスキーはこれを交感的コミュニケーションと呼び(Malinowski)、情報伝達機能をほとんど持たないような言葉のやりとりがあるのではないかと主張している。

また別の視点では、あなたとわたしで明日から毎日ジョギングをしようと約束したとする。これはわたしからあなたに誘いかけたという意味では情報の伝達という側面も一部内包されるが、しかし重要なことに、あなたとわたしで共同の約束事(ジョギングする)を形成し、それを互いに「了解する」という行為には、情報の伝達以上の機構と作用がはたらいていると考えられる。哲学者のギルバートはこのような行為を、共同コミットメントと呼んでいる(Gilbert, 1989)。

本研究では、交感的コミュニケーションや共同コミットメントはじめとした、情報伝達では説明しきれない人間固有な心的作用について観察し、それらの間の共通項の抽出を実施した。その結果、これらのコミュニケーションの根底に、「わたしたちを主語とする2重の入れ子構造的な心理」を構築させる機構が存在することを提案した(図1; 阪口、2024)。

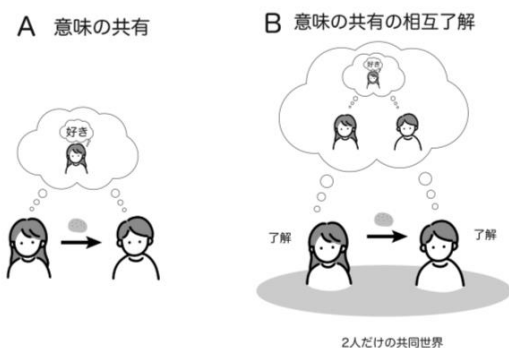


図1 2重の入れ子構造的な心理と相互了解
この機構は2次の心の理論(わたしは「Aさんが「B

さんが何を考えている」と考えているか)がわかる)の実行が不可能とみられるヒト以外の動物では観察されず、また、現状の人工知能においても未だヒトと同等のレベルには達しておらず、ヒト固有であると考えられる。

デジタル社会では情報伝達が加速する一方で、人と人をつなぎ合わせる「情報伝達を目的としない」コミュニケーションの機会が少なくなっている。相互の了解は相互の承認をもたらすことから、現代では翻って、つながりの希薄がSNSでの攻撃行為などといった、存在承認のための欲求行為の発露となってみられるのかもしれない。したがってデジタルツールでこれを補完するしくみの実装が急務であり、特に、最近著しい技術革新を見せる人工知能への心の理論の実装が、期待される。

[発表論文]

1. 阪口幸駿、『危ぶまれつつある人間本来コミュニケーション』、第1回デジタルコミュニケーション研究会、2023
2. 阪口幸駿、『「ヒトらしさ=概念化×象徴性×階層性×共同志向性」か？—ヒトと動物や機械とを分ける認知機能群解明のための基礎的考察2—』、日本心理学会第87回大会、2023
3. 阪口幸駿、『ヒトってどうやってつくるの？—ヒトに固有な認知機能群の探求—』、第10回認知科学若手のワークショップ、2023
4. 阪口幸駿、『共調をまとめよう—多分野を統合した新しい学問体系の構築』、第5回共調的社会脳研究会、2023
5. 阪口幸駿、富田健太(編)、『「合う」のメカニズムを科学する—影響し合う「あなた」と「わたし」の心理学』、ミネルヴァ書房、2024